

安政東海津波と安政南海道津波

嘉永7年11月4日（1854年12月23日）朝9時ごろ東海道沖で、32時間後の翌5日（同12月24日）16時ごろ紀伊半島沖で、ともにマグニチュード8.4の巨大地震が発生した。

東海道沖地震では、房総半島から土佐湾に至る沿岸各地を大津波が襲い、特に伊豆と志摩・熊野浦沿岸に大打撃を与えた。そして、翌5日の地震でも、津波が房総半島沿岸から九州東岸の広範囲を襲い、紀伊西岸および土佐湾沿岸に甚大な被害を及ぼしたのである。

4日の地震では約600人、5日の地震では約3,000人が死亡。この一連の地震を契機に、幕府は年号を嘉永から安政への改元した。

- 4日、伊豆下田市中では、人家が破損し火災が発生。人々が外へ逃げ出したところへ、ほどなく津波が押し寄せた。川筋の町全域が津波に呑み込まれ、68町が残らず原野と化した。3,907人のうち85人が死亡。

折りしも下田湾若の浦に碇泊中のロシア軍艦ディアナ号は、纜を切られたため大破（27日に沈没）したが、ロシア人は全員船中にいて助かり、多くの水難者を救った。また、医師2人を筒井・川路に見舞いとして寄こしたという。

- 若（和歌）山では、若山城内の櫓や堀など数か所崩れた程度だったが、海士、有田、熊野、勢州海岸付の浦村の被害は甚大で、人家の流失、

焼亡、潰家など多く、田畑に砂が入り、床堀もあった。

紀州・勢州領浦村では、津波のため68,000石余の田畑が冠水。流失、潰家、破損、焼失した家屋は16,608軒に及び、699人が溺死した。

- 大阪では、津波は安治川、木津川に押し上がった。近海にいた大船小船が道頓堀へ流れ込み、高橋や樋吉橋などを押し流し、多数の船が重なり合い押し入ったため、壊れた船も数が知れないほどだった。長堀や堀江、道頓堀に近い人々は、船で逃げようとしたが、押し入った大船に乗り敷かれ破船して、多くの人が溺死した。ある大家町人も、主従18人で1艘に乗り込み、留守は手代に任せて出船したが、残らず溺死した。また、沖にいた樽船、菱垣船は無事だった。潰家83、破船1,842、溺死273人。

- 土佐高知では、5日7時に起こった地震と津波の被害が甚大だった。市中は大火となり、津波のため、町はあたかも海のようにであった。圧死や焼死する者の数およそ数十人。6日にも火勢は衰えず、海潮もますますあふれ、倉皇山に逃げる人、城中に逃げる人、あるいは橋梁が焼けて逃げ場を失う人など狼狽騒擾の状態は、今や世界の終焉かと疑われるほどだった。

焼失、流失、潰家17,469軒、損毛21,530石、死者372人。

（日本地震史料より抄出）



京都府立総合資料館蔵

早引方角附

世直覽

寅、年、瑞、事、錄

大坂市中之方格

[illegible]